

ショートショート詰め合わせ

豆まき

車内アナウンス

1話 車内アナウンス

男は仕事終わり、電車に乗っていた。
普通列車で間も無く終点ということもあり、人は少なかった。
もう夜の11時になる。
男は、朝から夜まで働き詰めだった。
明日も仕事がある。
帰ったら、晩御飯を食べて風呂に入ったら、もう寝るだけだ。

男は車内広告をぼんやり見ている。
湯布院の旅行案内だった。
「のんびり温泉でも行きたいな・・・無理だよなあ」
ため息をつく。
最後に旅行に行ったのは、新卒1年目の夏休みだった。
それからは、まとまった休みはなかった。
明日も明後日もまた、この普通列車に乗っているのだろう。
男はまた、ため息をついた。
こんな生活をあと何年続けるのだろうか。

♪♪♪

車内にメロディが流れる。
もうすぐ終点のようだ。
車掌の声が聞こえてくる。
「ご乗車ありがとうございます。間も無く終点 戸石です。
本日も丸花線をご利用いただきありがとうございました。
・・・今日1日お疲れ様でした。お気をつけてお帰りください」

ゆっくりで聞き取りやすい声だった。
この声を聞いて男は、少しだけ気分が軽くなった。
車掌の声質のためか
自分のような客のために、一言付け足してくれたからか。
理由はどうでもよかった。
それでも、開いた扉から出てきた靴音は、いつもよりは軽かった。

駅は、夜の11時

静かになるのは、もう少しかかるようだ。

移籍

2話 移籍

男はサッカー競技場に来ていた。
自分の好きなサッカーチームを応援するためだ。
最近は忙しくて中々見に来ることができなかった。
だが今回は無理矢理休みを入れて見に来た。

好きな選手がもうすぐ移籍するかもしれないのだ。

男は元々サッカーにそれほど興味があるわけではなかった。
たまたま、友人からチケットをもらい暇だったので見に行った。
その試合で点を決めたのが彼だった。
その選手が自分と同年で
プロデビューしてそれほど経っていない選手だったからだろう。
その選手に興味を持ち、サッカーも好きになっていった。

チームも彼の活躍と共に、勝ち進んでいった。
元々お金のない貧乏チームだったので、チームの躍進は話題となった。
彼もチームのために攻撃だけでなく守備にも全力で走った。
そんな彼の姿は男だけでなく、老若男女様々なサポーターに感動を与えた。

そんな時、彼に連絡が届いた。
東京のチームからのオファーだった。
そのチームは、日本代表にも多くの選手を出しているチームだった。
そのチームに昔の恩師が監督に就任し、新しいチームに彼を欲しがったのだ。

彼は悩んだ。
彼の夢は日本代表に選ばれて、世界を相手に活躍することだ。

今のチームなら、自分に理解のある人間がたくさんいる。
ここでレギュラーとして活躍する方がいいのではないか。
東京のチームは、いい選手がたくさんいてレギュラーとして
試合に出るのは、難しいかもしれない。

彼は悩んだ。

夜も眠れないほど考えた。

彼は決断した。

移籍することを。

4年近くいた、このチームを去ることを。

試合は、前半に相手のエースに点を決められるものの

後半の序盤に1点を取り返した。

彼も全力で走った。

チームのためにどうしても勝ちたかった。

あと1点入れれば、逆転できる。

流れはこちらに来ていた。

しかし、機材のトラブルが起これ試合が中断してしまった。

これにより、せっかくの有利な流れがなくなってしまった。

再開した直後に相手のエースが、あっさり点を決め

チームは負けた。

男は試合終了のホイッスルを聞き、ため息をついた。

そして挨拶に来る選手を激励しようと、前の方の席に行った。

彼は悔しさで胸が一杯だった。

もうこのチームでは試合ができない。

移籍を決めたのは自分とはいえ、今まで支えてくれた

チーム、サポーターのために勝ちたかった。

「康太！」

大きな声がした。

小学3年生くらいの男の子が彼に向かって叫んでいた。

男も叫んだ。

「康太！」

気付くと周りのサポーター全員が叫んでいた。

「康太！康太！康太！」

自分の名前が呼ばれている。

彼は俯いていた顔を上げた。

サポーターが、全員自分に向かって懸命に叫んでいる。

その姿を見た瞬間、視界がゆがんだ。

男は彼が泣き出し、スタッフにコートをかけてもらう姿を見た。

そして分かった。

彼は移籍するのだと。

「こうた——！！！」

男は叫んだ。

彼のためにできることはそれだけだった。

男は、彼が去った後タオルで顔を拭いた。

彼が日本代表に選ばれ、活躍する半年前のことだった。

箱

3話 箱

男は、主から届けられた箱を見ていた。
箱の大きさは、小さな杯が一つ入るくらいだ。
箱にはしっかりと封がしてある。
男は、このところ病気がちだった。
それで主からこの箱が送られてきたのだった。

主は、自由奔放な人だった。
隣で見ていると驚いたことは数え切れない。
いつも男には、大変な仕事ばかり押し付けてきた。
やっとのことで仕事を片付けると、主は新しいことを始め
男は、その後処理をしてきた。
主がいない時はいつも留守番をしていたが
それで死ぬような目にもあった。
そうやって必死の思いでやってきた男に主は
「俺が見込んだ男だ。それぐらいできて当然だ！」
と笑うのだった。

もう何十年も、主と二人三脚でこの世界を走ってきた。
しかし、最近では主と意見が合わないことが増えている。
主は頑固だが、男も同じくらい頑固だった。
今までは、二人で解決策を考えてながら乗り越えてきた。
今回の問題は、話し合いでは解決しないだろう。
考えの根が異なるのだ。
曲げられない信念があるからこそ
ここまで大きくなり、今の対立がある。

男は懐から小刀を出し、封を切った。
箱を開ける。

中は空だった。

男はこれを見て悟った。
主から言いたいことは、これなのだと。

男は、小さな壺を持ってきた。
かねてから用意していたものだ。
透明だが、粘り気が少しある液体を杯に注ぐ。
手紙は用意していない。
そんなものなくても、男のことは主がよく分かっている。

男は息をつき、一気に杯を空にした。
男が倒れ落ちる。
息が苦しくなり、目の前がどんどん暗くなる。
何か大きな袋のような物に包まれる感じがする。
何も見えなくなった男の視界が、一瞬だけ明るくなった。

「俺についてこい！共に天下をとるぞ！」

主は最期まで主だ。

男は笑った。
出会ったころと何も変わっていない。
本当は主に天下をとってほしい気持ちもあった。
けど自分には、見届けることができなかった。
自分がいなくなることで主は前に進める。

これでいいのだと男は思った。

部屋に残されたのは、空の箱だけだった。

凧揚げ

4話 凧揚げ

光樹は正月がくるのを楽しみにしていた。
お父さんが凧を買ってくれたのだ。
今友達の間で、人気のキャラクターが描かれたきれいな凧だ。
光樹は早く凧揚げをしたくて大晦日は中々眠れなかった。

1月1日の朝、冬休みはいつも8時に起きていた光樹が
6時に目を覚ました。
歯をみがいて、顔を洗い、朝ご飯のトーストまで用意した。
起きてきたお母さんがびっくりする。
「あらあら、光樹くん全部自分でして、すごいわね。
これなら毎日が凧揚げだといいのにね」
ニコニコと笑う。

眠そうな顔をしてお父さんが起きてきた。
「あけましておめでとう。うーん、昨日の酒が少し残ってる」
お父さんは、お酒に弱いのでいつもは飲まないが、新年を迎えるので
日本酒を飲んだのだ。
「お父さん早く凧揚げ行こう」
光樹がお父さんのパジャマを引っ張る。
「待て待て、朝ご飯くらい食わせてくれ」
お父さんが、光樹の作ったトーストをモソモソと食べている間
光樹は、凧を見たり、持って走り回ったりしていた。

光樹とお父さんが家の外に出ると
隣のおばあちゃんが、朝から掃除をしていた。
「あけましておめでとう。あら光ちゃん、きれいな凧ね。
お父さんに買ってもらったの？」
「あけましておめでとうございます。
うん！お父さんが買ってくれた！
今から凧揚げするの！」
「それはいいわね。けどここだと電線に引っかかるわね」
「はい。なので海でしようかと思っています」
お父さんが答えた。

「それがいいわね。昔は凧揚げをできる所はたくさんあったけど最近、空もゴチャゴチャしていて不便ね」

「広い空き地も減ってますからね。最近の子は遊ぶ場所がなくて少しかわいそうですよ」

「そうね。政府は少子化対策というけれど、環境を整えないし、そもそも・・・おばあちゃんの話が長くなりそうなので、適当なところで話を切り海へ出かけた。

海は、自転車で30分くらいかかる。

今までに、家族で何回か来たことがある。

海に着くと、多くはないが凧揚げをしている人たちがいる。

天気は晴れ、風も程よく吹いている。

光樹は、最初は1人でするといって走り回ったが凧は上手く上がらなかった。

そこでお父さんが凧を持ち、光樹が走り、凧が風に上手く乗ったところでお父さんが凧を離す方法にした。

何回か失敗したが、3回目で上手く上がった。

「糸はピンと伸ばすんだぞ」

お父さんのアドバイスで糸がピンと伸びた状態で少しずつ糸を伸ばす。

凧はどんどん正月の澄んだ空を上がっていく。

光樹の凧を見て周りの子たちが、スゲー、スゲーと近寄ってくる。

光樹は嬉しくなり、さらに糸を伸ばそうとした。

ビュー

その時強風が吹き、凧はバランスを崩した。

光樹がなんとか持ち直そうとするも、

凧はパタリと地面に落ちてしまった。

「いいとこまで上がったな。光樹うまいぞ！」

お父さんが言うと、光樹は顔を輝かせて

「もう一回！お父さんもう一回する！」

と凧揚げの面白さに夢中なようだ。

「よし！世界で一番高く凧を上げるぞ！光樹！」

「うん！」

お正月の海は寒かったが光樹は、とても熱くなった。

通学路

5話 通学路

祥哉は、友人の拓巳と通学路を下校していた。

通学路といっても、田舎の田んぼの脇を通る道だ。

祥哉は毎日この道を自転車で通学している。

この日は、中間テストの最終日で祥哉は開放感を味わいながら、ペダルをこいでいた。

「数Ⅱどうだった？」

「ダメだった。数学ムリ！」

「高木の授業ホント眠いんだよな」

「今の季節に、午後に高木の授業とか
眠ってくださいって言ってるようなもんだよな！」

そんなことを言いながら、帰っていると

どこからか、鳥の声が聞こえてきた。

これは何の鳥だろうか

祥哉はふと考えた。

「どうしたんだよ。ぼんやりして」

「いや、なんでもない」

祥哉は、通学路をゆっくりと帰るのが好きだった。

自分たちの出す音以外は、鳥の声や風が田んぼを吹き抜ける音しか聞こえない。

音に溢れている生活をしていた祥哉は、空を飛ぶ鳥の声が聞こえるなんて

想像もしたことがなかった。

6月の学祭の帰りには、カエルが大声で合唱していて驚いたことがある。

1度田んぼに落ちそうになったこともある。

毎年新入生の何人かは、田んぼに落ちると言われていたが

危うく自分もその1人になるところだった。

田んぼ道の一角には、牛小屋もあった。

これが暑い季節になると臭うのだ。

風向き次第では、教室の中にまで臭ってくる。

暑いから、窓を開けると牛糞くさい。

祥哉も最初は嫌だったが、だんだん慣れて来た。

同級生の1人がはしゃぎすぎて、自転車ごと牛小屋に突っ込んだこともあった。

1年と数ヶ月しか通っていなかったのに、ただの単調な一本道なのに
祥哉は、この通学路が好きになった。

誰も言わないが、拓巳も他のみんなもそうなのだと感じることは、時々ある。

「明日どっか行こうぜ！」

「どこ行く？カラオケ？ボーリング？」

拓巳の笑顔を見ながら祥哉は自転車をこぎ、田んぼ道を帰っていった。

2人以外は、ヒバリが鳴くだけの静かな道だ。

挨拶

6話 挨拶

里美は挨拶が嫌いだった。

親や学校の先生が、挨拶しろと里美に言えば言うほど

里美は挨拶が嫌いになっていった。

最初は嫌いではなかった。

小学生の頃は、きちんと挨拶をしていた。

中学生になり、みんな挨拶をしなくなっていった。

きちんと挨拶をする奴はカッコ悪い、ダサい。

周りの子はそう思っていた。

里美は最初、それが理解できなかった。

中学生になってもご近所の人や先生にきちんと挨拶をした。

中学2年生の時に、新しい体育教師がやってきた。

生徒指導もするらしい。

いかにも厳しそうな先生だった。

ある日、里美は校門に立って生徒指導をしている

体育教師に向かって挨拶をした。

そのまま通りすぎようとしたら

「伊藤、ちょっと待て」

呼び止められた。

「お前、髪が茶色だな。染め直してこい」

里美は驚いた。

里美の髪は、生まれてからずっとこの色だった。

「私の髪は、元々この色でした。染めてません！」

里美は必死に言った。

「染めている奴はみんなそう言うんだよ！！！」

そんな言い訳が通用するか！！！」

さっさと染め直してこい！！！」

体育教師は、大声で怒鳴った。

里美がどう言おうと聞く耳を持たなかった。

挙句のはてには、このままでは高校進学にも響くと
内申書のことまで持ち出してきた。
里美は、悔しくて悔しくてその日は、早退して部屋で泣いた。

仕事から帰ってきた母は、里美の様子を見て驚いた。
話を聞き怒り、体育教師に文句を言いに行った。
しかし、体育教師は聞く耳を持たず内申書の件を出し
「お母さん、このままでは生活態度の面で
高校推薦が受けれなくなる可能性があります。
まずは、髪を染めて挨拶ができるようにならないといけません」
と言い、母はどうすることもできなかった。

その夜、里美は髪を黒く染めた。
母が髪を染めている間、悔しくて涙が止まらなかった。
そして、そんな体育教師に挨拶をした自分に後悔した。
挨拶をしなければ、こんな目に合わずに済んだのに、里美はずっとそう思っていた。

それから1年、里美は挨拶をしなくなった。
周りの子と同じように。
挨拶をしたら、自分が損をする。
里美はそう思っていた。

里美は、ある朝学校に行く途中
ご近所の人に、シクラメンが咲いているのを見つけた。
「わあ。きれい」
里美はシクラメンが昔から好きで、1度育てたこともあった。
最初はきれいに咲いていたが、次第に枯れてしまった。
「あら、お客様かしら」
庭の隅から、小さなおばあさんが出てきた。
「すみません。あんまりきれいなので・・・」
里美は言葉に詰まった。
「謝ることないわ。シクラメンもたくさんの人に見てもらったほうが喜ぶわ」
おばあさんは嬉しそうに笑った。
その顔を見て、里美も笑顔になった。
「私もシクラメンを育てたことがあるんですけど、上手くいかなくて・・・」
「そうね。育てるのは少しコツがいるかしら。」

けど、ポイントをきちんと押さえたら、気難しい花じゃないわ」

里美は、もっとおばあさんと話したかったが、学校に行く途中だったのでまた見に来ることを伝えて、その場を去った。

次の日、里美はいつもより早く家を出た。

おばあさんとシクラメンに会うためだ。

おばあさんは、庭仕事をしていた。

里美が来たことには気づいていない。

「あっ・・・あの・・・」

中々言葉が出てこない。

里美は思い切り息を吸った。

「おはようございます！！！」

おばあさんは、気付きこっちを振り向いた。

そして、笑顔になった。

「おはよう。いい天気ね。またシクラメンを見に来てくれたのかしら。とっても嬉しいわ。今日は時間あるの？お話ししたくて待ってたわ」

「はい。私もです！！」

里美は嬉しかった。

おばあさんと話せることが。

シクラメンを見られることが。

里美は勇気を出して挨拶をしてよかったと心から思った。

庭に白いシクラメンが、誇らしげに咲いていた。

秋刀魚

7話 秋刀魚

むかし、むかし、おじいさんがお昼ご飯に、
魚屋さんから買った秋刀魚を食べようと
家の前で焼いていました。

どこからともなくやってくる野良猫たちを
シッシッと手で追い払いながら、丁寧に焼いていました。
いい具合に焼けてきました。

辺りは秋刀魚のいいにおいでいっぱいです。
ご飯も、炊きたてアツアツのご飯を用意しました。
お醤油の準備もできた。

さあ食べよう！

おじいさんが箸を取った時、山の方から馬の駆けてくる
音が聞こえてきました。

それも一頭や二頭ではなく、二十頭くらいのたくさんの音です。

「殿、ここ一帯は殿にお出しできるほどの料理屋はございません」
厳つい顔のお侍が言いました。

「しかし、余は腹が減った。庶民が食べるようなもので構わぬ。
何かないのか？」

白い馬から降りた人は上品な雰囲気を漂わせ、高貴な人だとすぐ
おじいさんは分かりました。

「先ほどからいいにおいがするので、こちらの方に駆けてきたのだが。
これはなんのにおいじゃ？」

「これは・・・秋刀魚という魚でございます」

「おいしそうじゃな。ぜひ食べたいぞ」

高貴な人がいうと

「しかし、秋刀魚は殿がお食べになるような魚ではありません。
秋刀魚は、庶民が食べる魚で殿のお口にあうようなものでは・・・」

「黙れ！余が食べると言うておるのじゃ！

口にあうか、あわないかは余が決める！」

高貴な人が、大きな声で叱りつけるように言いました。

怒鳴ったわけではありませんが、すごい迫力です。

上品な雰囲気が、一気に軍勢を統率する猛将のような雰囲気になりました。

影から見ていたおじいさんは、これは相当偉いお侍様が来たのだと思いました。
そして、先ほどから話題になっているのは、
自分が焼いた秋刀魚だということも、ハッキリと分かりました。
おじいさんにとっての秋刀魚は、頑張った時の自分へのご褒美である・・・つまりちょっとした贅沢なものでした。
それが食べることすら恥ずかしいものだとはい
偉い人は一体普段何を食べているのだろうかと思いました。
万が一に備えて秋刀魚は、熱々のおいしい状態にしておこう。
たかが秋刀魚一匹で打ち首などになりたくない。
おじいさんは、秋刀魚を出せるようにしておきました。

厳つい顔のお侍は、困った顔をしておじいさんの方へやって来ました。
どうやら高貴な人の我儘を何とかするのも彼の役目のようです。
お侍様も大変だなあ、わしにゃ絶対できねえな。
おじいさんはやって来たお侍に、頭を深く下げました。

「そこの者、実は頼みたいことがあってな。
・・・今そなたが焼いているその秋刀魚ゆずってくれぬか。
もちろん銭は払う」

お侍の顔は、苦渋に満ちていました。
それほど高貴な人に、秋刀魚を食べさせたくないのか
おじいさんをお願いするのが嫌なのか
分かりませんが、おじいさんは断る気にはなれませんでした。

「へい。もちろんお譲りします。
ただ高貴な方のお口にあうかは分かりませんが・・・」
「そなたが心配せずともよい。
飯と醤油も合わせて、これでよいか」
お侍が出した、銭はおじいさんの家のもの全てを売っても
届かないような大金でした。
おじいさんは、びっくりして危うく腰を抜かすところでした。
「こんな大金・・・秋刀魚一匹に・・・受け取れません！」
「この銭で殿の機嫌がなおれば安いものだ。
なに殿が普段行かれる店に比べたら大したものではない」
おじいさんは、高貴な人は普段、金銀でも食べているのだろうかと思いました。
「では、秋刀魚をお受けとりください」
おじいさんは秋刀魚を渡し、ブルブル震える手で銭の入った袋を受け取りました。

お侍は高貴な人のところに戻り、どこからか卓を取り出し
秋刀魚とご飯を並べました。
秋刀魚もご飯もホカホカと湯気をたて、それはそれはおいしそうでした。
出された箸も綺麗な細工の施された一品です。
きっとこの箸一膳で、おじいさんの先祖代々の畑が買えることでしょう。

秋刀魚に箸が入り

サクッ

いい音をたて身が表れます。

一口大になった秋刀魚の身が、高貴な人の口へと入っていきます。

ゴクリ

思わずおじいさんは息を飲みました。

見ると、厳つい顔のお侍も他のお侍も皆全員

息を飲んで見守っています。

ムシャムシャ・・・ゴクリ

「・・・これは・・・うまい！うまいぞ！」
そう言うと高貴な人は、よほどおいしかったらしく
すごい勢いで、秋刀魚とご飯を食べてしまいました。
「これほどうまい魚は初めてじゃ！
庶民はこんなうまいものを食べていたのか！
毎日出てくる鯛より遥かにうまいぞ！
いや実に満足した」
高貴な人はとても幸せそうな顔をしていました。

その言葉を聞いておじいさんは、ホッとしました。
厳つい顔のお侍もホッとした表情をしました。

しかし、顔を引き締めて

「殿、どうか外で秋刀魚を食べたということは口外しないよう
お願い致します。周りの者に知れたら家名に泥を塗ることになります」

高貴な人は少し考え

「これほどうまいものを食べたことを誰にも話せぬか・・・

皆かわいそうじゃな。秋刀魚を食べずにいるなど。

余は分かった。

普段自分たちが価値がないと思っているものも

実際には宝であるかもしれない・・・

皆の者城に戻るぞ！

やることが沢山出てきたぞ！」

そう言うと、高貴な人は馬にひらりと乗り、駆けて行きました。

「殿、お待ちください！」

慌ててお侍たちも駆けて行きました。

おじいさんは、一人になり

「疲れたなあ。また秋刀魚を焼くのも手間だしなあ。

今日は沢庵とご飯にしよう」

そう言って家に帰って行きました。

後日

おじいさんのところに、厳つい顔のお侍がまたやって来ました。

「殿が秋刀魚は目黒に限ると仰せなのだ。

なんとか秋刀魚を売ってはくれぬか」

おじいさんは、びっくりしてまた腰を抜かしそうになりましたとき。

おしまい

改札口

8話 改札口

男は、改札口で客が出す切符を確認していた。

四国の田舎のローカル線

駅は古いが、トイレだけは最新のものが導入されている。

トイレの設置は利用客の要望によるものらしい。

外観は古いが中は新しい、ヨーロッパの建物ではよくあるが日本ではそういったものは、あまりない。

この利用客は、駅の形は変えたくないのだろう。

昭和の初期からの外観そのままだ。

最近ようやく電子端末が導入されてたが

駅の改札口はまだ対応できておらず、

電車の車掌が改札口で電子端末を目視確認していた。

若い人たちは、大きな駅で使うこともあり

すぐに慣れていったが、お年寄りの人たちは

切符を使っている人たちもたくさんいる。

「はい、ありがとうございます。気をつけて帰ってな」

男は、改札口を通る人たちの切符や電子端末を確認しながら挨拶をしていた。

地元の人たちが利用するので、ほとんどの顔を覚えていた。

いちいち確認しなくても無賃乗車をする人などいないが

みんなの顔を見て切符を受け取るのが、男のやり甲斐でもあった。

「ばあちゃん、ちょっと見なかったけどどうしたんだい？」

男は、最後の乗客である、おばあさんに声をかけた。

そのおばあさんは、男が最初に覚えた人の1人だった。

「車掌さん、こんにちは

孫の結婚式に行ってたのよ」

「それはおめでとう」

「ありがとうございます。もしかしたらひ孫の顔が見れるかもしれない。

それまでは元気でいないとね！」

「そりゃあ楽しみだね」

話をしながら男は、おばあさんの荷物を運んだ。

おばあさんは、もう80そこそこになる。
彼女の荷物を運ぶのも、車掌の大切な仕事だ。
杖をつくおばあさんのために
一番端の改札口を開け、通れるようにする。
駅の前には古びたベンチがあった。
もうすぐバスが到着する。

ここからは家までバスだ。
小さなバスがやって来た。
バスの運転手とも顔馴染みだ。

荷物はバスの運転手に預ける。
もう夕方の5時を過ぎた。
バスがおばあさんの家に着く頃には、
日も暮れだしているだろう。
男は、時計を確認した。
あとは6時と7時のお客を運ぶだけだ。

男は元々大阪市の大学に通っていて、そこで就職しようと思っていた。
しかし、就活をしていく中で都会での仕事は、自分にあわないと感じ
高校まで過ごしたこの町に戻ってきた。

確かに都会と比べると、ここは不便なことがたくさんある。
面倒なこともたくさんある。
それでも、ここで暮らすことにしてよかったと思う。
自分はこの町がっているのだ。

男は改札口を通り、電車の方へと向かっていった。

きな粉パン

9話 きな粉パン

「わあ、懐かしい！」

美香は今日、土曜日授業で午前中で終わりだ。

お昼ご飯は、何かパンを食べようと思い

通学路にあるパン屋に入った。

このパン屋は、夫婦で経営しており

無口な主人が作るパンが、中高年の女性を中心に大人気だった。

店には、スタンダードなパンからお洒落なパンまで

主人の渾身の作品が並んでいた。

美香は、その中であるパンを見て

思わず声をあげた。

きな粉パンである。

手書きのプレートに

『懐かしの給食きな粉パン』

と男らしい字で紹介されていた。

内容と字とのギャップに美香はクスリと笑う。

「それはウチの人気商品なんですよ」

美香の反応を見た店員が説明する。

50そこそこの女性で、どこか小学校の

給食のおばちゃんを連想させる。

多分奥さんだろう。

無口で厳つい主人とニコニコと愛想のいい奥さんは

とてもお似合いだった。

「女性だけでなく男性にも人気で

会社帰りの方がよく買って帰られます」

そういえば、小学校のきな粉パンはみんな大好きだったな。

美香は思い出していた。

お休みの人の分をジャンケンで奪い合ったっけ。

美香は今、大学生で一人暮らしをしているからか、昔を思い出すきな粉パンを見て、無性に食べたくなった。大学の学食もおいしいけど、小学校の給食はやはり特別だ。

ご飯よりもパンの方が、おかずが豪華に感じられてパンの日は、お昼が楽しみだった。美香がパン党になった理由も、そこにあるのかもしれない。

学校から配られた給食の予定表を見るのも好きだった。食べたいものがある日には、赤ペンで丸をつけていた。

クリスマスなど行事がある日には、その行事に関わる料理が出てきて、その行事について学ぶことができた。

食べ物を赤色、緑色、黄色に分けてバランスよく食べることも教えてもらった。そういえば最近、緑色ばかり食べているな。バランスよく食べないといけないな。給食のおばちゃんに怒られちゃう。

給食には沢山の思い出があった。

きな粉パンを見て、それをふっと思い出した。

「すみません。きな粉パン1つください！」おばさんの店員は、ニコニコしながらいいにおいのする紙袋に、丁寧にきな粉パンを入れた。

美香は、早く食べたくて家への帰り道を小走りで帰っていった。

待ち人

10話 待ち人

彼は待っていた。
待ち人がいるのだ。
ずっと前から待っている。
とても大切な人だ。
幼い自分を育ててくれた人だ。
かれこれ10年近く待っている。
そろそろ現れるだろう。
彼は確信していた。

暑い夏の日も寒い冬の日も
彼は待ち続けた。

そんな彼を駅にいる人たちはよく思わなかった。
駅員には邪魔者扱いされ、殴られた。
屋台の親父には、商売ができなくなると
何度も追い払われた。
悪餓鬼どもにイタズラされたこともあった。
しかし、彼は諦めるわけにはいかなかった。

待ち続けてしばらく経つと
自分を理解してくれる人たちもでてきた。
差し入れを持ってきてくれる人もいた。
彼は感謝しつつも、まだ待っていた。

3月の暖かいある日

彼は今日は特別な日だと分かった。
いつもと違う、そう感じる。

体をシャンと伸ばし、朝早くに駅で待った。

駅の方から歩いてくる人影があった。
彼は分かった。

待っていた人がようやく来てくれたと。

間違えるはずがない。

あの帽子

猫背で、ガニ股気味に歩く歩き方

あの人だ！

「よう！ずっと待ってくれていたのか！

悪かったな、待たせちゃって。

これからは一緒に歩けるな！

なァに時間はある。

ゆっくり歩こうや！」

彼は嬉しかった。

伝えたいこともたくさんあった。

ゆっくり歩きながら伝えればいい。

二つの影が駅の向こうへと消えていった。

11話 月の兎

中国 唐の都 長安

月が丸く輝く夜

大勢の人で賑わう屋敷があった。

飲めや歌えの大騒ぎ。

そんな中一人の男が酒で火照った体を冷まそうと

池がある庭に出てきた。

縁側に腰掛けて夜空を見ると、それはそれは

綺麗な月が出ていた。

男は月があまりにも綺麗で、しばらくぼんやりと眺めていた。

月が掴めないものかと手を伸ばしてみるも、手は空をきるだけだ。

「何をしておられる」

恰幅のいい男が奥から出てきた。

大分酒がまわっているようだ。

「月が近いもので掴めないものかと試していました」

男は笑う。

笑うとつり気味の目が垂れ、優しく知的な印象になる。

「それで月が手に入るなら苦労せぬわ。

俺も酒の相手をしてほしくて、何度も月を掴もうとしたが

奴め、池の上だ、雲の影だ、すぐに逃げやがる」

恰幅のいい男は、豪快に笑った。

「不思議なものです。奈良で見た月も、長安で見た月も

同じもののはずなのに、最近は奈良の月が恋しくてなりませぬ」

「長く異国の地にいれば誰だってそうなる。

三十年近く唐にいるのだろう？」

「はい。ですが私は本当にいい経験ができました。

こちらの方々にはよくしていただき感謝しています」

「そうか・・・別れは人の世の常といえど

友に会えなくなるのは寂しくなるな・・・

ええい！こういった話しは俺は好かん！

この席は、そなたの別れの席であるが同時に

新たなる門出の席でもあるのだ！

そなたほどの男、日の本で国を動かす大臣になるのだろう。
そうなれば俺は日の本に行った時には、美酒を浴びるほど
飲むことができる！」

俺は笑った。

「日の本に来るつもりですか？

いつでもお越してください。美酒を用意しておきますよ。

月を見ながら飲みましょう！

餅も用意しておきますよ」

「日の本では、月を見ながら餅を食うのだったな」

「はい。月の兎は餅をついている。

我が国ではそう言われています」

言われて、恰幅のいい男はしげしげと月を見た。

「餅か・・・唐では不老不死の薬を作っているといわれているな」

「どちらにせよ、月には兎がいるのですね」

「国が違えど、似たようなことを考えるものなのだな」

「不思議なものですね。月の兎から見れば

きっと我々は、ご近所同士、近いところに見えるのかもしれないね」

男は酒が抜けたとみえて、すっきりした顔で伸びをした。

「さて、そろそろ戻りますよ。

王維殿にもきちんと挨拶をしないと」

「そうだな。奴も寂しがらうな。

あまり顔には出さないがな」

二人の男は騒がしい室内へと戻っていく。

二人の背には、満月が輝いていた。

12話 青の世界

俺は今、青い世界にいる。
周り一面青色だ。
だが優しい世界ではない。
むしろ過酷な世界だ。
暑く、息苦しい。
俺は体力には自信がある。
だから何とかやってこれている。
周りには俺と同じような連中がたくさんいるが
次々に命を落としている。
このままでは俺も死んだ奴らと同じ運命になるだろう。
俺は一か八か賭けにでることにした。
意地を張っても仕方ない。
そろそろチャンスがやってきそうだ。

「はい。いらっしゃい。1回200円ね。
ありがとう。これを使ってね」

下から様子を伺った。
こりゃ賢そうなガキだ。
親もまともそうだ。
よし決めたぞ。
俺はこの青の世界から抜け出す！

「あっ！この子かわいい！」
「気をつけるんだよ。そっとそっと」

バシャピチピチ

「やったあ！捕まえたあ！」
「やったね、お嬢ちゃん。大切にしてくれよ」

ガチャ
「ただいまあ。ママ早く早く！」

「慌てないで。そおっと入れてあげないとビックリしちゃうわよ」

チャポン

「ママ見て見て！元気そうだよ！」

「そうね。色も綺麗だし、美由大切にするのよ！」

「はーい！」

「いい子ね。さぁお風呂に入りましょう」

パタパタパタ

ふーう。

やっと落ち着いたぜ。

どうやら俺は賭けに勝ったみたいだな。

周りを見てみると、砂利も水草もある。

おまけにフィルターを使って、水は常にきれいに保たれている。

そして他の奴はいない！俺が独占できる！

最高じゃないか！

あとは毎日のメシだが・・・まぁガキが忘れても

あの母親ならメシもくれそうだな。

あとはさっさとデカくなって、他の連中がこないようにするだけだな。

パタパタパタ

「忘れてた！はい金ちゃん。壁紙だよ～、青色でキレーでしょ」

あのガキ

丁寧に水槽の周りにシートをかけていきやがった。

なくてよかったのによお。

青色はもう勘弁して欲しいぜ。

UFOキャッチャー

13話 UFOキャッチャー

土曜日の午後2時半

大型ショッピングモールに、絹恵は息子の龍太と買い物に来ていた。

絹恵の目的は、龍太の靴下、犬の餌とトイレシート、絹恵の好きなアイドルのCD、修理を依頼していたデジカメ、その他生鮮品などだ。

必要なものは大抵このショッピングモールで手に入る。

午前中に手際良くまわり、目的をあらかじめ達成できた。

あとは、後回しにしていたアイドルのCDを買いに行くだけだ。

その前に寄るところがある。

ゲームセンターだ。

龍太ぐらいの年の子向けのゲームがたくさんある。

警備員も常に巡回している。

ここで遊ぶのが龍太の楽しみだった。

このために龍太は、買い物で歩きまわるのを耐えてきたのだ。

好きなものを一つだけ遊ぶようにさせていた。

龍太のお気に入りには、人気キャラクターと冒険をするというゲームだった。

アクションは、一種類のボタンを押すだけだが、そのたびにキャラクターの声が聞こえる。

ステージをクリアすると、キャラクターのカードがもらえる。

龍太はカードをたくさん持っていて、綺麗な菓子箱に大切に保管している。

今日もそれをするだろうと思っていたら、龍太は別のものに興味を示した。

「ママ、これやってみたい。このネコピー欲しい」

UFOキャッチャーだった。

この中に、ネコピーという夕方放送されているアニメのキャラクターが入っている。

「やめておきなさい。とれなくて泣くだけよ」

「けど卓也くんも持ってたよ。」

お父さんに取ってもらったって」

卓也くんは近所の子で、そのお父さんは

名を出せば日本人なら、誰でも知っている商社に勤めている。

見かけ爽やか、スポーツも小学校の運動会で証明済み、そして一流商社。

そのうえUFOキャッチャーのようなゲームまでできるとは

世の中は不公平だ。

見るとそれほど大きくないし、値段も100円なので

龍太が1回やって無理でも、あと1、2回自分がすれば取れるだろうと絹恵は思った。

「よく狙いを定めるのよ。そこよ！今！」

龍太にタイミングを知らせながら、取りやすそうな位置にいるネコピーに狙いを定めた。

「ああー！おいしい！」

少しネコピーのところを行き過ぎ、きれいに挟むことができなかった。

「ちょっとママがやってみるね」

絹恵は、横向きになっているネコピーの右肩から股を挟んで取ろうとした。

「ええっ！ウソっ！」

思わず絹恵は声に出してしまった。

確かにネコピーをきれいに挟むことはできた。

できたのだが、アームが持ち上げるのを拒否したかのように、

ネコピーは落下してしまった。

「このアームおかしいわよ！」

絹恵は、アームがおかしいのではないかと考えて

もう1つ設置されている、別のアームで試してみることにした。

「なんで！こっちも！」

こちらのアームでも同じようにネコピーは、すり抜けるように落ちた。

「あと少しなのに！」

絹恵はあともう少しで、取れるところを2回連続で逃してしまい

頭に血がのぼってしまった。

ご近所には、落ち着いた優しい奥さんで通しているので

UFOキャッチャーにムキになっている姿を見られたら大変なはずだが

今の絹恵は、そこまで気をまわす余裕がなかった。

「もう1回！」

ガチャ

ウィーン

ポトッ

「なんでよ！なんでそこで落ちるの！」

ええい！もう1回！」

「ママ・・・」

「龍太静かに！あともう少し！」

ポトツ

「・・・もう1回」

「・・・」

ポトツ

「クソッ！もう1回！」

ウィーン

「あっ掴んだ！よし！いけ！いけー！」

ポトリ

コロコロ

ガチャ

「やったー！！！」

ネコピーが商品取り出し口に落ちてきた。

絹恵は思わずガッツポーズをする。

「はい龍太、取れたわよ」

すっかり待ちくたびれた龍太にネコピーを渡す。

「ありがとうママ」

疲れた様子で龍太が答える。

絹恵はふと冷静になり財布を覗いた。

「ええっと100、200、・・・700円！」

このUFOキャッチャーで計700円使ったことになる。

「思わぬ出費になってしまったわ・・・」

絹恵は思ったより、お金がかかったこともだが

ムキになり、どんどんお金を費やしたことにガックリとした。

「龍太もう帰りましょう・・・」

絹恵は、楽しみにしていたアイドルのCDを買う気力がなくなってしまった。

龍太の手をひきトボトボと帰っていった。

そしてもう2度と、UFOキャッチャーはしないと絹恵は心に決めたのだった。

14話 ノルマ

俺はいつも通り空から、下の様子を伺っていた。

おっ！砂漠にカモ発見！

さっそく砂漠に降りて行った。

砂漠はどこまでも続いている。

ジリジリと照りつける砂上には、生き物の影一つない。

その砂漠に今にも干からびて、死にそうな男がいた。

「こんにちは」

男は俺を見て驚く。

「これは幻か、もう俺は死ぬのか」

「それを決めるのは、あなた自身

生きるも死ぬもお好きなように」

「お前は悪魔なのか」

「そう言われることもありますし

別の呼ばれ方をする時もあります」

「俺を助けてくれるのか！」

男は、救いを求めるようにこちらを見た。

俺は、ニヤリと笑う。

「もちろん！ただし・・・条件が一つあります」

「魂をよこせなどと言うのか」

「違います。私はあなたの優先権が欲しいのです」

「優先権？どういうことだ」

「あなたが死ぬ時に、魂の案内を私に任せるということです。

通常は死んだ後、魂は彷徨うことになります。

彷徨う魂を見つけ出して、裁きの場に連れていくのが

本来の私たちの役目です」

男はきちんと聞いている。

人間には頭のよくない者も多く、分かりやすく説明するのが大変なのだ。

俺は続ける。

「そのときに私に任せてくださいれば、

すぐに私が駆けつけて、裁きの場までご案内できます。

どうですか？

あなたにとって損はない。
むしろ彷徨うことなく、スムーズに向こうに行ける。
お得でしょう？
この紙にサインをするだけです！」
そうやって自作の契約書をヒラヒラと振る。

男は理解できたようだが、まだ納得していないようだ。
「そんなことをしてお前に何の得がある」

こいつ疑り深いなあ。
ここまで説明したら、大抵おちるのに。
自分の状況分かってんの？

しかしセールス用の笑顔で
「まあ簡単にいうとノルマ達成のためですよ。
私たちの仕事は、ノルマというものがあります。
1カ月で何人案内したかという。
そのため他の者と差をつけるために、事前をお願いをしているわけです！
もちろんこのことは、お客様に不利益をもたらすことはありません！」
と丁寧に説明した。

男は考えた。
俺は根気強く待つことにした。
砂漠に太陽からの熱が降り注ぐ。
俺は、なんてことないが男はもう限界だろう。

「分かった。お前に任せる」
「はい、契約ありがとうございます！！」
男は契約書にサインをする。

俺は、懐から水を出した。
男は、牛か馬かのようにガボガボと水を飲んでいく。
そして男の両腕を掴み、砂漠の終わりまでひとっ飛びした。
そこで男を降ろす。
ここから真っ直ぐ歩けば町がある。
男は俺が何も言わずともフラフラと歩いていく。

じきに俺のことは忘れるだろう。

これでよしと！

あとはあの男が死ぬのを待つだけ。

何年生きるんだ、あの男は。

契約書を見る。

契約書にサインをすると

男の生年月日と死亡日時が表示されるようになっている。

思わず舌打ちをする。

あと30年はゆうに生きる。

最近の人間はムダに長生きしすぎだ。

昔みたいに50年くらいで死んでくれりゃいいのに。

手元のノートにメモする。

今月のノルマは30件

現在25件達成

あと5件は、自力で探して回るか・・・めんどいなあ。

そもそも俺がこんなことを始めたのは、毎日あちこち飛び回るのが嫌でやっているのだ。

予約を確保できなかった自分を責めるしかない。

ノルマない仕事に転職しようかな？

友達に地獄で、罪人を釜茹でにしてるけど、あれ楽そうだよなあ～。

けど試験あるし、俺にはムリかな。

俺は肩をトントンと叩いて、雲の上に戻るために羽を広げた。

15話 闇

「ばあちゃん、元気してた～」

「太一ちゃん大きくなったね～。ゆっくりしていきなさい」

太一は、久しぶりに母方の祖母の家に帰っていた。

小学生の頃は、毎年遊びに来ていたが、

流石に高校生あたりからは、忙しくなって

中々帰ることができなくなっていた。

「ばあちゃん、トイレ新しくしたの？」

「秀くんが、私が楽なようにって水洗式にしてくれたのよ」

秀くんとは、太一の叔父のことだ。

今までは、汲み取り式のトイレだった。

祖母の体への負担を考えて、水洗式に工事したそうだ。

トイレだけでなく家自体が古い家で、あちこちにガタがきている。

だが祖母にとっては、祖父と暮らした大切な家だ。

叔父もそのことは理解しており、祖母が健在の間は

補修して使っていくつもりらしい。

太一はトイレがどんな風変わったか見てみた。

といっても、ごく普通のトイレだ。

前は、ちょっとした部屋くらいの広さがあり

便器が男性用小便器と和式便器の2つがあった。

今は、洋式便器が1つだけで

照明も白熱電球からLED電球になっている。

太一は昔暗くなると、このトイレが怖くてたまらなかった。

縁側を通っていくのだが、縁側には照明がなくトイレの入口から

中の様子がわからなかった。

暗い縁側を通り、高い所にあるスイッチを押し

暗い便所の和式便器で用を足すのだ。

おまけに外の風音が隙間から聞こえてくる。

たまにネズミも出たりする。

怖くないわけがない。

幼い頃は、母か祖母に付き添ってもらわなければ、
用を足すことができなかった。

今思うと何がそれほど怖かったかというと
暗さ、闇だ。

何も分からない闇に向かって進むのは勇気がいる。
まして、想像力豊かな子どもの頃は
闇からどんな恐ろしいお化けがでるのかと
考えてしまい、それだけで足が進まなくなったものだ。

太一の家は祖母の家と違い、明かりが家中にあった。
祖母の家は、あちこちに明かりが届かない場所があった。
そこに怖さがあった。
きっと昔は祖母の家のように、お化けを生み出す場所はたくさんあったのだろう。
今は明かりが増えて闇がなくなり、
お化けの居場所がなくなってしまった。
その代わりに、都市伝説など形を変えて現れているのだろう。

お化けが見えなくなったのは、いつからか。
「大人になってしまったのかな？」
「なあ じいちゃん」
太一は、写真の祖父に言った。
写真の祖父が少し笑った気がした。

あとがき

あとがき

この本を読んでいただき、ありがとうございます。
ちょっとした短編集を書いてみたいなと思い
このような形になりました。

それぞれのお話について、少しだけ補足をしておきます。
本文のネタバレをしているものも、ありますのでご注意ください。

1話 車内アナウンス

これは電車に乗っていた時に、車掌さんがこのような
アナウンスをしていて、印象に残ったので作りました。

2話 移籍

サッカー選手の移籍のお話です。
サッカー選手は、選手寿命が短いため移籍は頻繁に起こります。
チームを応援する人たちは、選手との出会い別れに涙しながら応援します。

3話 箱

三国時代に活躍した、魏の荀彧の死に様について書いたものです。
彼の死には諸説あり、ここでは「魏氏春秋」のエピソードを少しアレンジしています。

4話 凧揚げ

これは正月の風景を書いたものです。
凧揚げできるような広い場所を見つけにくくて、
凧揚げができないのは、少し寂しい気もします。

5話 通学路

これは高校生の下校風景を書いたものです。
田んぼ道にいると鳥の声が聞こえて、ビックリします。

6話 挨拶

今回、補足を書いたのはこのお話のためのようなものでして
現在の中学校、高校は事前に事情を説明すれば

髪色については配慮されるようになっているので
このお話のようなことは起こりにくいと思います。
このお話は、挨拶の大切さについて書きたかったのであり
学校の教員の方々を悪くいう意図はないので、
その点についてご理解ください。

7話 秋刀魚

落語で有名な「目黒の秋刀魚」をおじいさん目線で書いたものです。
おじいさん目線で見ると、お殿様の世間知らずっぷりがまた違ったかたちで
見れるかなと思い書きました。

8話 改札口

四国の電車に乗った時に、電車の運転士の方が切符を確認しているのを見て思いつきました。

9話 きな粉パン

パン屋で、きな粉パンを売っているのを見て思いつきました。
学校の給食というのは、日本の食において大きな影響を及ぼしていると思います。

10話 待ち人

忠犬ハチ公について書いたものです。
少し前に東大農学部キャンパスに、ハチ公と飼い主の上野博士が再会した銅像が設置されたそう
です。
再会できたみたいでなによりです。

11話 月の兎

阿倍仲麻呂と李白が交流があったということで書きました。
月見団子の文化は、平安時代に中国から伝わった
月にお供えをする祭りがルーツだそうです。
本文は平安時代の少し前なので、矛盾しますが
そこはスルーということでお願いします。

12話 青の世界

金魚掬いの金魚は、最初の1週間を乗り切れば長く生きます。
出来れば、専用の飼育セットを用意して飼ってあげてください。
美由ちゃんが巻いたシートは、飼育セットに付いているものです。
巻いても巻かなくても、どちらでも構いません。

13話 UFOキャッチャー

UFOキャッチャーは、慣れない人がすると意外にお金がかかることがあるので、気をつけてください。

14話 ノルマ

ノルマの達成件数については深く考えないでください。

15話 闇

子どもの頃は、暗闇が怖いものです。

これは生き物としての本能なのかなと思います。

以上補足でした。

ありがとうございました。 豆まき